

子どもの貧困を保育者および教職員はどう捉えているか (2) —施設・学校別及び経験年数別による貧困の捉え方について—

○飯田昭人 (北翔大学)
加藤弘通 (北海道大学)

水野君平 (北海道教育大学旭川校)

キーワード：子どもの貧困、貧困状況の捉え方

問題と目的

本研究では、「子どもの貧困対策に関する大綱」に謳われている「教育の支援」に焦点を当て、保育現場や学校で働いている保育士や教職員等を対象に、施設・学校別及び経験年数別による貧困の捉え方について分析考察した。

方 法

調査協力者と調査時期

A 市内の小学校全 18 校、中学校全 8 校 (私立中を除く)、保育施設 (保育園、幼稚園、認定こども園、小規模保育施設、事業所内保育施設、家庭的保育施設) 27 施設の合計 53 施設の保育関係者、教職員を対象にした。有効回答数は、小学校 15 校 282 人 (経験年数 10 年未満 63 人, 10 年以上 20 年未満 51 人, 20 年以上 168 人), 中学校 8 校 186 人 (経験年数 10 年未満 47 人, 10 年以上 20 年未満 47 人, 20 年以上 92 人), 保育施設 18 施設 209 人 (経験年数 10 年未満 105 人, 10 年以上 20 年未満 56 人, 20 年以上 48 人), 合計 41 施設 677 人。なお, 調査時期は 2017 年 12 月～2018 年 1 月であった。

調査内容

「滋賀県『子どもの貧困』対策のための支援者調査」(滋賀県・龍谷大学, 2016) を参考に調査票を作成した。本調査では、「子どもの貧困状況の捉え方 (9

項目)」「子どもの貧困にみられる状況 (9 項目)」「自分が考える必要な貧困支援 (12 項目)」を尋ねた (回答は「まったく深刻ではない; 1 点」—「非常に深刻である; 5 点」などの 5 件法)。また, その他の質問項目も尋ねたが, 本報告では省略する。

結果と考察

施設・学校別と経験年数別の 2 要因分散分析を行ったところ, Table 1 にある質問項目において有意差および有意傾向が認められた。

施設・学校別では複数の項目で, 小学校, 中学校よりも保育施設のほうが, 貧困に対する捉え方などの得点が低かった。子どもの年齢が低いことから貧困状況に気づきにくいことや, 小中学校ほど子どもの貧困に対する対策が周知されていないことが考えられる。

経験年数別では, 2 項目において, 経験年数 10 年未満のほうの捉え方などの得点が低かった。

なお, 「園や学校の勉強などが理解できない」という項目に関して, 施設・学校別ならびに経験年数別でも差が認められた。ひとり親家庭であること, 勉強の理解に関すること, 登園渋りや長期欠席などが, 子どもの貧困にまつわる現象であるとともに, 子どもの貧困については, 喫緊の課題として取り組んでいくことが求められるであろう。

Table 1 子どもの貧困の捉え方についての分散分析の結果

	施設 学校	経 験 年数	交 互 作用	多重比較 (Tukey)
子どものいる世帯が児童扶養手当 (ひとり親家庭に対する手当) を受給している	5. 45**	1. 07	1. 93	保育施設<小学校, 中学校
子どものいる世帯が就学援助費 (学用品等に対する援助) を受給している	0. 81	2. 59†	0. 49	10 年未満<10~20 年
ひとり親家庭である	11. 89***	0. 42	0. 21	保育施設<小学校, 中学校
引越しや転校が多い	6. 16**	1. 96	0. 82	保育施設<小学校, 中学校
園や学校の勉強などが理解できない	8. 95***	3. 49*	0. 76	10 年未満<10~20 年, 20 年～
園や学校で登園渋りや長期欠席を経験している	7. 05**	1. 85	0. 46	小学校<保育施設
園や学校での専門家 (例えば SSW, SC など) による支援	2. 81†	0. 06	0. 79	中学校<小学校
子どもの進学などの進路に対する支援	2. 61†	0. 59	2. 10	保育施設<小学校
親の就労の支援	0. 56	3. 69*	0. 89	10~20 年<10 年未満, 20 年～

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$